

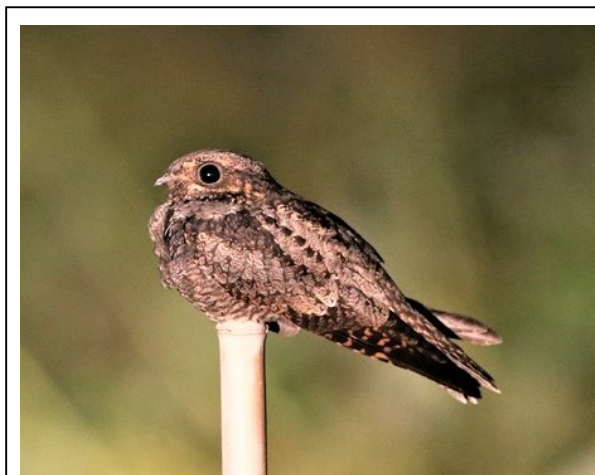
ヨタカ *Caprimulgus indicus* Latham

【選定理由】

早いものは4月上旬に飛来し、遅いものは11月下旬に飛去する夏鳥である。主に山地に生息し、丘陵地や平地にも生息して繁殖していたが、1990年代に激減した。2000年頃には平野部やその周辺から繁殖期の確認記録がほとんど消失し、丘陵地や山地の生息数も大きく減少している。

【形態】

全長 29cm。頭頂および上面は灰褐色で、細かく黒い虫くい状の斑がある。翼は細長く灰白色で、黒色と橙褐色の複雑な斑がある。雄は、喉、頬の下、初列風切に白色部があり、外側尾羽に白斑がある。雌は、喉と翼の白色部は淡褐色で、外側尾羽の白斑はない。嘴は小さいが大きく開き、付け根に剛毛がある。



愛知県西尾市, 2013年9月29日, 鈴木恒則 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

夏期に平野部から丘陵地および山地に飛来し、現在は丘陵地や山地で繁殖する。

【国内の分布】

九州以北、北海道までの国内に夏鳥として飛来する。

【世界の分布】

インド、ネパール、東南アジア、ロシア極東南部、中国東部、朝鮮半島、マレー半島に分布し、北方のものは冬期に南下する。

【生息地の環境／生態的特性】

4月に渡来し、丘陵地や山地の明るい林に生息する。夜間に、甲虫、トビケラ、ガなどの昆虫類を大きな口を開け空中を飛びながら捕獲する。繁殖期の夜間にはキョキョキョ…とかな高い声で鳴き、複数の場合は、ゴア、ゴア、ゴアなどと鳴くことも多い。松林を好み、昼間は松の横枝上に枝と平行に止まって休息することが多いが、県内の松林の多くは現在も松枯れによって消失し続けている。本来の営巣環境は、禿山のように見える皆伐林や薪炭林、萱場などであるが、現在の県内にこのような環境は皆無である。営巣には巣材を一切用いず、地上に直接1~2卵を産卵して繁殖する。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては、平野部から丘陵地および県内全域の山地に普通に生息し1972年には名古屋市緑区でも繁殖が確認されていたが、近年は繁殖期に平野部の繁殖はなくなり、丘陵部での繁殖はごく少数になって、山間部でもかなり減少している。一時は農道や林道をはじめ、丘陵部や山間部の整備された道路での轢死例も少なくなかったが、近年はこうした現象も確認されなくなっている。県内全域では夜間人工光の蔓延により、餌となる夜行性昆虫類の生息環境が攪乱されていること、および農林業の衰退により、繁殖環境である手入れされた草地や薪炭林の消失が減少の要因である。

【保全上の留意点】

車の前照灯や野外の夜間照明を極力LEDに変更して、紫外線に敏感な昆虫類を幻惑させないことが重要である。農林業の振興を図り里山環境を再生することで、豊かであった日本本来の里山生態系が復活できる。

【特記事項】

国内でも減少傾向の強い種ではあるが、県内には平野部や沿岸部にある広い農地や、平野に近い山地などで毎年少数ではあるが、夜間に秋の渡り途中の個体を確認できる場所もある。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.43. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)